

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告(大阪・広島・福岡)
- 連載:日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 留学生インタビュー

-慶應義塾大学SFC  
鈴木佑治氏によるコラム-

Vol.24, February

\*TOEFLは、エデュケーションナル・  
テストング・サービス(ETS)  
の登録商標です\*

 メールマガジンに登録する

立春も過ぎ少しづつ日が長くなってきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今月は、冒頭の「世界で活躍する日本人」で、国連大学プログラムオフィサーの大西 好宣さんに、アジアに焦点を当てた「国際化」についてご寄稿いただきました。前号より連載を開始した慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木 佑治教授による「日本から発信する英語」では、「コミュニケーションとしての言葉」についてご自身の体験や授業の様子を取り入れお話しいただいています。また、昨年末に、西日本で開催したセミナーシリーズの報告と3月に福岡で実施が決定したTOEFL®-PBT説明会のお知らせ、好評連載中の「言葉の玉手箱」、「留学生インタビュー」も掲載中。

では、今月のTOEFLメールマガジンをお楽しみください。

#### 巻頭特集:世界で活躍する日本人 [Click!](#)

世界を舞台に活躍されている方々にお話を伺うコーナーです。

今回は、国連大学でプログラムオフィサーを務めていらっしゃる大西 好宣(おおにし・よしのぶ)さんにご寄稿いただきました。特にアジアに注目した「国際化」について2回にわたって掲載いたします。今回はその1回目です。

#### 連載:日本から発信する英語 [Click!](#)

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで環境情報学部の教授をされている鈴木 佑治(すずき・ゆうじ)先生に、英語という「言語」の学習についてお話しいただいています。前号より始まったこのコーナーでは、先生ご自身の体験談や実際の教室での出来事などケース・スタディーも含め、グローバル時代の様々なコミュニケーションをテーマにした盛りだくさんの内容をお届けします。

#### セミナー報告(大阪・広島・福岡) [Click!](#)

当事業部では、2003年末に大阪を皮切りに西日本地域においてTOEFL研究セミナーを実施いたしました。英語教育関係者の方を中心に多くの方々にご参加いただき、皆様のTOEFLテストへの関心の深さが伺えました。今回は、大阪、福岡、広島でのセミナーの様子と、3月に福岡での実施が決定したTOEFL-PBT説明会についてお知らせします。

#### 言葉の玉手箱 [Click!](#)

Temple University Japan助教授の川手 ミヤジェイェフスカ 恩先生による異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方に焦点をあてた人気コーナーです。毎回楽しい、役に立つ一言をご紹介。川手先生による興味深い解説とともに、言葉の世界の意外な一面をお楽しみください。

#### 留学生インタビュー [Click!](#)

既に海外へ飛び立っている先輩達に、留学準備や現在の様子、今後についてお話頂いているこのコーナー。海外留学を考えていらっしゃる皆さん、先輩達のコメントを参考にしてみたいでしょうか。

4回目は、フルートの音楽留学で渡米され、Jazzの魅力に惹かれ更に2年の留学延長を決められた永井 紀子(ながい・のりこ)さんに聞きました。

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告(大阪・広島・福岡)
- 連載:日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 慶應義塾大学SFC  
鈴木佑治氏によるコラム—
- 留学生インタビュー

\*TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス  
(ETS)の登録商標です\*

> [HOME](#)

## 巻頭特集：世界で活躍する日本人

～アジアの大学に目を向けよう～

連載第1回：なぜ今、アジアの大学か



国際連合大学プログラムオフィサー

### 大西 好宣（おおにし よしのぶ）さん

世界を舞台に活躍されている方々にお話を伺うコーナーです。  
今回は、国連大学でプログラムオフィサーを務めていらっしゃる大西  
好宣さんにご寄稿いただきました。特にアジアに注目した「国際  
化」について2回にわたって掲載いたします。今回はその1回目です。

#### 略 歴

1986年	<a href="#">慶應義塾大学経済学部</a> 卒業
	<a href="#">日本放送協会(NHK)</a> 入局
1992年	<a href="#">米コロンビア大学行政学・国際問題大学院</a> 修士課程 入学
1993年	<a href="#">ニューヨーク市環境保全局</a> コンサルタント
1994年	米コロンビア大学行政学・国際問題大学院修士課程 修了
	<a href="#">笹川平和財団</a> プログラムオフィサー(*)
2001年	<a href="#">タイ・チュラロンコン大学</a> 高等教育大学院博士課程 入学
2003年	<a href="#">国際連合大学</a> プログラムオフィサー

私の経歴の中で日本人として比較的珍しいと思われるのは、タイの大学への留学経験があることだろうと思います。とは言え、卒業間近というこの時期になっても、実は私、片言のタイ語しか話せません。そのため、担当教官や同級生たちとは全て（お互いに母国語でない）英語で意思疎通するという、大変貴重な経験をしています。そこでこのコラムでは、英語ができれば英語圏以外の国に留学するという選択肢もあることを実体験からお話しようと思います。

普通日本人が留学というと、たいていは欧米へのそれを頭に浮かべるのではないのでしょうか。私自身もその例に漏れず、最初の留学先はやはりアメリカでした。統計上でも、オーストラリアやニュージーランド、カナダなどを加えれば、英語圏への留学生数は全体の8



割から9割を占めるのではないかと思います。後で少し触れますが、確かにこのような国々の大学は高い教育・研究水準を誇っていますし、中でもアメリカのそれが（様々な瑕疵はあるにしろ）突出していることは、高等教育の研究者なら誰もが認めるところです。そんな中で、私がアジアの大学に行こうと思ったのは、もちろんいろいろな理由があります。そのうちのひとつは、私が30歳を超えてから留学した米コロンビア大学行政大学院の友人たちです。お互いに英語が下手なためでしょう、アメリカの大学に留学しても私の友人の多くは韓国や台湾の出身者でした。彼らとの付き合いが深まるにつれ、自分はいかにアジアのことについて知らないかということに気づかされたのです。「アジア人としての自分」に目覚めた瞬間でした。

そしてもっと大きな理由は、帰国してから勤務した笹川平和財団で東南アジアを仕事の舞台にした経験です。そこで私は、シンガポールやマレーシア、タイ、フィリピン、ベトナムなどASEANの様々な知識人と出会いました。彼らはまた優れた大学人であり人格者でもあったため、彼らへの敬意が「その所属先=大学」への関心が変わるのはごく自然な成り行きだったのです。特に私の関心を引いたのは、発展途上国におけるエリート排出機関としての大学でした(\*\*)。18歳人口の2人に1人が大学に進学する今の日本ではなかなか想像できないことかもしれませんが、わが国にもかつては「学士サマなら娘をやるか」と言われた時代があったのです。日本にとっては最早歴史に過ぎない出来事を、私は言わばアジアの国々で追体験したわけです。これは実に貴重で、瞠目すべき経験でした。そこで私は、学歴の最後を飾る博士号を日本以外のアジアで取ろうと考えたのです。いえ、そればかりでなく、大学院での専攻自体も高等教育=大学の研究とすることにしました。

### 私が見たタイの大学



私の留学先である国立チュラロンコン大学は、1917年に創立され長い伝統を誇る東南アジアでも有数の大学ですが、日本人の博士課程学生を受け入れたのは私が初めてだということです。この大学は、もともと官僚養成を目的として設立されたこと、国立であること、首都にあること、入試が最難関であること、最も規模が大きいことなどから

ら、よく我が国の東大と比較されます。しかしタイの大学進学率は、公開大学（無試験で入れる大学）を除けばまだ7~8%程度ですので、それこそ「学士サマなら・・・」と言われていた戦前の東京帝国大学に近いでしょう。

先に私は、タイ人の教授から全て英語で指導を受けている旨お話ししましたが、実は私が所属する高等教育学大学院(\*\*\*)には、修士・博士共に英語での正式な教育課程はありません。ですが、教授陣に欧米で教育を受けた人が多いため、個人ベースではこのようなことも可能なのです。もちろん、大学の公式HPにもパンフレットにも「英語での指導可能」とは掲載されていませんし、教授によっては嫌がる人もいるでしょうから、留学に際しては個人的にアポを取ってこの点を確認する必要があることは言うまでもありません。

もっとも、経営学部やマスコミ学部など、英語でのコースを正式に持っている学部や課程がこの大学には幾つもあり、そこでは世界中の留学生を受け入れています。タイにはチュラロンコン大と双璧をなすタマサート大という有名校がありますが、やはりここでも経済学部などでは英語のみで博士号を取ることが可能です。この大学はかつてチュラロンコン大から政治学を中心として分派した大学で、チュラロンコン大が保守的なのに対し、タマサート大はリベラルな校風があると言われています。私立大学のトップはおそらく首都バンコクにあるミッション系のアサンブション大でしょう。この大学はフィリピンやミャンマーなどから多数の教授を雇い、学部段階から英語での授業を数多く実施しています。この大学が実施する世論調査の社会的な信用度も大変高く、その点でも全国的に有名な存在です。

タイにはこの他、ラムカムヘン大学、スコタイタマチラート公開大学という無試験で入れる大学が2校あります。前者は法曹関係に進むOBが多く通学が必要ですが、後者は原則としてTVやラジオで学習するため、通学の必要ない、言わば日本の放送大学のような大学です。両方とも数十万人という規模の学生数を抱え、これがタイの全体的な大学進学率を押し上げています。この2校はタイが大量の中間層を形成する原動力となっており、同国の経済発展とも深い関係がある、というのが私の仮説です。それが正しいとすれば、タイより遅れて経済開放を進めているASEANの後発加盟国、すなわち、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアでもタイの経験から学ぶものは大きいはずで

## アメリカや日本の大学との比較

既にお話ししたように、タイの大学には英米への留学経験を持つ教官が大勢います。正確な統計は持っていませんが、チュラロンコン大の指導教官に確認したところ、人数や出世の度合いではタイ全土でアメリカ留学組が圧倒しているとのことでした。そのため、アメリカ式のシステムを導入している大学が多いようです。例えば、私の所属する大学院で博士号を取ろうとした場合、最初の1,2年はコースワークがあり、それらをクリアした段階で、次の大きな節目として博士号候補になるためのcomprehensive examと呼ばれる試験があります。高等教育専修の場合には、統計学、学生指導論、高等教育経営論、カリキュラム論などが必須科目として指定され、2日から3日に及ぶ筆記試験が課される他、博士論文の予定内容についての口頭試問があります。どれかを失敗した場合には、一度だけ全体の再試験を受けることが許されます（つまり全て最初からやり直し）。これらを全てクリアして、初めて学生は博士論文の執筆が許されるのです。このように、博士課程生から博士号候補に、そして博士にという流れは典型的なアメリカの制度を導入したものです。

アメリカのシステムだけ真似て、内容は全然違うという例は、こと大学だけに限らず日本社会一般でもよく見られることです。しかし、上の制度だけは決してそのような「仏作って魂入れず」ではありません。アメリカの大学院でコンプ（= comprehensive exam）に受かったと言え、大抵なら手放しで大げさなほど褒めてくれるはず。コンプ突破は人生の一大事、とまで言った人を現に私は知っています。またある友人は、コンプは入試と同じく、基本的には落とすためのものだと言います。アメリカでのこのテストがいかに厳しいものかわかっていたかと思えます。



チュラロンコン大でも、試験結果が要求点に満たない場合は本当に容赦なく落とされます。実際、私の1期上の先輩たちが大量に再試験に回ったことを聞かされ、この時ばかりは少々慌てました。そしてタイでは（おそらくアメリカでも）、コンプの前には学生同士が団結します。私も同級生や再試験に回った先輩たちとそれこそ額を突き合わせ、何日にもわたって情報交換や出題予想をしました。このような努力はもちろんテスト自体のために役立ちましたが、それにも増して、タイの友人たちと心底仲良くなれたことがとても嬉しい出来事でした。今では懐かしい思い出です。日本の大学では、博士号候補という呼称もそのためのテストを実施することも一般的ではないようですが、論文執筆以前にもうひとつのハードルを用意するというのは、学生に目的意識を与える上でおもしろい選択肢だと思うのですがどうでしょうか。

### タイの大学生は制服着用

一方で、タイ独特の習慣と思われるようなこともあります。外部の人から見てもわかりやすい例は制服の着用でしょう。学部の2年生まで、上は白のシャツ、下は黒のズボンまたはスカートを着用することが義務づけられています。日本でも昭和40年代の前半まで、男子は詰襟と相場が決まっていたますが、女子もというのは珍しいのではないかと思います。そして最も違うのは、教授と学生との関係だと思えます。アメリカ留学中は、よく先生の家でクッキーをご馳走してもらいながらゼミをやったりしたものです。日本でも教授と学生とのコンパというのは珍しいことではないでしょう。しかし、タイでは余りそのような例を聞きません。タイでは先生は絶対的な存在ですから、学生が友達感覚で付き合うなどということはおそらくないのではないのでしょうか。入学したてのある日のこと。私が校舎から出て短い階段を下りようとする、友人が袖を引っ張ります。「そこは先生用の階段。僕たち学生はこちら」と言うではありませんか。彼によると、校舎正面にある広くて立派な階段は先生用のもので、その脇にある細くて目立たない方が学生用だということでした。もちろん、そのような表示はどこにもないのですが、タイの学生はごく自然にそれを識別しています。

### タイの大学の日本人

例えばアメリカの大学などに比べれば極々少ない人数ですが、タイの大学にも日本人はいます。ただ、チュラロンコン大の例では学部・大学院を含め、その多くが提携校との1年未満の交換留学です。私の「同期」は学部生10数名、修士課程1名でした。つまり、学位取得を目的とした正規課程への留学は私と修士課程の女性の2人のみで、数の上ではやはり珍しいようです。また、学部を中心とした交換留学の場合には原則としてタイ人学生と同じ授業を取る、高いレベルのタイ語を話せること、また数か月内に話せるようになることは必須要件です。



一方で、大学付属の語学学校には日本人が結構いるようです。数週間から数年まで在籍期間がまちまちなので、日本人学生数は定かではありませんが、柔らかで耳に心地よいタイ語を学ぶことが一種のブームになっているというのは嬉しいことではあります。チュラロンコン大のタイ語コースにいた日本人女性（俳優のあおい輝彦氏のお嬢さん）が、歌手としてタイでCDデビューを果たし、今タイの若者の人気者になっているというおもしろい例もあります。

(次号に続く)

#### 【脚注】

\*プログラムオフィサーの仕事については[拙稿](#)をご覧ください。

\*\*エリートというと日本では「エリート気取り」など、どちらかと言えば否定的な響きがありますが、ここでのエリートとは国の将来を担っていくリーダー層のことを指し、比較的肯定的な意味合いで使っています。

\*\*\*正式には教育学大学院高等教育学科と言いますが、この学科のみ建物も教育学部とは別棟にあり、独特のカリキュラムと講師陣が配されています。また、学部レベルではこの学科はなく、修士以上で初めて登場するなどの点から、教育学大学院とは別の高等教育大学院と称する方がより実態に近いと感じています。

[Back to top](#)

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告 (大阪・広島・福岡)
- 連載:日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 慶應義塾大学SFC  
鈴木佑治氏によるコラム
- 留学生インタビュー

\*TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス  
(ETS)の登録商標です\*

> [HOME](#)

## 日本から発信する英語

～慶應義塾大学SFC教授  
鈴木佑治氏によるコラム～

第2回目:「使える英語」- 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC)の実践現場



SFCにおける鈴木研究室の取り組みは、[こちら](#)からご覧いただけます。

# Dr. Yuji Suzuki

慶應義塾大学SFC教授  
鈴木佑治(すずき・ゆうじ)氏

1944年3月2日生まれ。1966年、慶應義塾大学文学部英文科卒業。  
1978年、ジョージタウン大学大学院博士課程修了。Ph. D(言語学博士)。  
専門分野は、言語学(意味論、語用論)、英語学。

### 大学生から幼児までやる気にさせる英語コミュニケーション活動

1978年、前回で述べた米国での体験を踏まえて日本に帰ってきた私は、英語で考えて発表する「発信型」の授業を導入し、「訳読型」がはびこっていた日本の英語教育を変えようと考えました。ここからは大学の英語の授業の話になりますが、幼児・小学生・中学生そして高校生を抱える先生方や保護者の方々にも耳を傾けていただきたいのです。子どもたちが大きくなって大学生になったらどういうふうに英語を学んだらよいのか知っておく必要があると思うからです。前回私がアメリカ留学の体験談をしたのもそのため、本場ではどういう英語力が要求されているのか、到達点を先に知っておく方が分かりやすいからです。



到達点がわかれば、幼児・小学生・中学生そして高校生が、英語とどのように接したらよいか分かります。それに、私が大学の英語の授業で行っている事は、あらゆる年齢の子どもたちでも簡単にできることです。子どもだけではありません。英語に自信をなくした社会人にも当てはまります。私はたまたま出身校の慶應大学に雇用していただきましたので、そこでの実践体験ということになりますが、慶應大学だけではなくどの大学でもできることなのです。私がどんな立派な事を言っても、本当に実行していないのであれば説得力はありません。そういう意味でも、まず私が本務校の慶應大学でどんな授業を実践しているかをお伝えしたいと思います。少々自慢も入りますが、それは私自身についてではなく私の学生についての自慢です。毎年本当に素晴らしい学生たちに出会っていますが、全員は紹介できませんのでそのうちの何人かを紹介しながらお話しいたします。

【写真は、「コミュニケーション」をキーワードに、英語教育実践などの応用研究を行っている鈴木研究会の様子】

慶應大学といえども、全員英語が得意な人たちばかりではありません。中には本当に英語が苦手な人たちもいるのです。そんな学生さん達と接するようになったのは、1990年から1994年まで湘南藤沢キャンパス（以後略称SFC）の総合政策学部長（現：千葉商科大学学長）をされていた加藤寛先生の「鈴木さん、英語ができない人の面倒をみてください。」というさりげない一言がきっかけでした。加藤寛先生には、研究や教育だけではなく、人生においていろいろな生き方を教えていただきましたので、この言葉を重く受け止めました。

できない人よりはできる人を教えた方が楽です。帰国子女のように、できる学生に英語でコンテンツを教えることができたならなんと楽でしょう。しかし、それは外国語としての英語を教えることにはなりません。帰国子女にとって英語は母語かあるいは第二言語であり、外国語ではないのです。そこで、SFCが創設された1990年から2000年までの10年間は、英語を苦手とする学生さん達を相手に英語のプログラムを立ち上げました。私達はこの頃を「創設期」とか「開拓期」と分類しておりますが、まずはその10年間の土台作りについてお話しいたします。

私は、2人の志を同じくする同僚と"Action, Communication, English"という「発信型プログラム」を作りました。頭文字をとって略称ACEです。「コミュニケーション」は「ことば」というよりは「行動」、すなわち「アクション」です。それを英語でやるのです。苦手といえども、もう6年も英語を学んできたのですから、それなりの英語の蓄えがあります。無いとしても、今までのように訳読型でやり直したところで効果は出ません。コミュニケーションは楽しいからやるのであって、つらいばかりで何の意味もないことを繰り返そうなんて思うわけはないのです。能力が無いからできないのではなく、やる意味が無いからできなただけで、意味のあることをやれば絶対にできるのです。これに対して、満足な文法力もないのにそんなことできる筈がないと反対意見を述べる先生方も少なくありません。中学の文法を一からやり直して丸暗記しなければ会話なんて無理だというのです。でも、そんなやり方で失敗したのですから同じ方法では失敗を繰り返すだけです。文法を無視するものではありません。逆に、使わなければ文法は身につかないのです。



【写真は、慶應義塾大学が夏季休業期間に実施しているWilliam&Mary大学での研修講座に参加したメンバー。最前列左が著者。】

コミュニケーションはアクションですから能動的で、自分の考えを行動で表現するのです。発信するのです。このことを私に教えてくれたのは、先ほど述べた私自身の体験もありますが、もう一人の先生である言語社会学者の鈴木孝夫先生です。アジア人、特に日本人は西洋のことはもう十分受動的に習ってきた、今こそ自分の意見を述べる時です。私はこのことを身をもって体験しました。文学でも言語学でも、他の国の人たちは、日本の文学、そして日本語について知りたがるのです。また、私は英語の意味論で博士論文を書いたのですが、私という日本人の文化的視点から英語の意味の世界を分析したつもりです。それを私の博士論文の指導をしてくださった恩師である故ウォルター・A・クック教授は評価してくださり、亡くなる間際まで英語文法論につき私と語り合ってた下さったものと思っています。日本とか日本人というよりは、学生個人の発想を表現する機会にしなければなりません。

## 関心あること・興味あることからメッセージを

ですから、コミュニケーションで発信する内容はおのずと学生個人が興味をもつものでなければなりません。今までは先生が選んだものを訳しながら、作者が何を言いたいのかを取り出しさえすればそれで良かったのですが、発想はまったく逆です。私の授業では、学生がまず自分が伝達したいテーマを決めなければいけません。でも、そんなに難しいことはありません。誰も何かに関心を持っているのですから。

もちろん、はじめから全員が積極的に関心を示すとは限りません。ある時、ポーとして何も話しながらいない学生がいました。興味など何もないというのです。では、いつも何をしているのか聞いてみたところ、暇さえあれば寝ているのだと言うのです。どうしてそんなに寝るのが好きなのか問いただしてみると、寝て夢を見るのが好きだからというのです。「寝ること」と「夢をみること」 - この2つがこの学生の好きなことでしょう。それでは「寝る」とはどういうことなのか、「夢」とは何かを考えたらいいので

す。この学生はそうしました。たまたま、精神分析学の授業を受けており、フロイトの夢と無意識のところを勉強していましたので、結構深い発表をしました。このような具合で、30人学生がいますと30の違うテーマが並ぶのです。このようなクラスを運営するといろいろな活動が出てきます。まず、**人前で話すことが重要になります**。いきなり英語で話せなどと言っても、心理的な接触、コンタクトが確立できなければ人は話しません。日本語でさえそうですから、不得手な英語などで話せるわけがありません。そこで、最初の2回の授業では日本語でお互い紹介し合いながら、所属クラブ、履修する授業、趣味等等、教室を開放して大声で思う存分話してもらいます。30分も話せば雰囲気や和み、1時間もすれば笑い声が聞こえてきてとても賑やかな雰囲気になってきます。

1時間後に、中学校で習った自己紹介に必要な英語の表現を黒板に書き練習させます。それを使って自己紹介の練習です。みんな大声でやり始めます。はじめて話す英語でしょう。でもとても自然な英語です。私がアメリカに行って人に会った時には、こんなことさえできませんでした。簡単なことですが、経験がないと本番ではうまくいきません。初対面の印象は大切です。ここから始めるのです。



3回目の授業から自分の興味のあることを人前で発表してもらいます。**ことばだけに頼らないように言います**。モノを見せるもよし、聞かせるもよし、踊るもよしです。この一言でずいぶん気が楽になるようです。自分の興味を好きなように2、3分で説明してくれるように言います。

ここから、学生の個性が出ます。たどたどしい英語で好きなヒップホップの世界を紹介する人もいれば、自分で作ってきたケーキを配って試食させてケーキ作りの話をする人もいます。タロットが好きな人は、タ

ロット占いをし始めます。30人いますので、時間はとても足りません。自分の話に酔って時間をオーバーする人、自分のクラブに友達を勧誘しようとする人、頭の硬い先生が見たら卒倒するような時間が経っていきます。気がつけば、それをみんな何とか英語でやりきるのです。黙っていても300語ぐらいの下書きを英文で書いて持ってくるのです。1時間に5行程度の和文英訳をして終わる授業よりよほどましです。それはなぜか。**オリジナル・アイディアだから**です。【写真は、Daily Yomiuriの記事。授業のプレゼンテーションでヒップホップの世界を紹介している模様が掲載された。（画像はクリックすると拡大します）】

## セルフアピール(Self-Appeal)からリサーチ・プレゼンテーション(Research-Presentation)へ

2ヶ月も過ぎると、若い柔軟な頭は自分の世界をかなり深く追求し、面白いプレゼンテーションをするようになります。友達の調べてきたものはよほど面白いと見えて、居眠りなどしている学生は一人もいません。誰かが素晴らしい発表をするとそれに挑発されるのか、こぞって工夫を凝らすようになります。ビデオ、オーバーヘッド・プロジェクター、CDなどを駆使して行う発表は、言葉だけでべらべら話す発表と比べて説得力があります。

教師である私の役割は、普通の英語授業の教師のそれとはまったく異なります。私は、どうしても分からない英語の表現を翻訳機械のように教えます。それ以上に、テーマの調べ方や問題の絞り方などについて、オフィスアワーなどを利用して相談にのります。電子メールもよく使います。また、発表の後で必ずコメントをして示唆を与えますが、内容について教えることはできません。例えば、私は野球が好きですが、野球についてのリサーチをしている体育会野球部の選手である学生に、野球自体についてあだこうだと内容を云々するほど体験も知識もありません。他方、彼らはとてもよく知っていますから、私は逆に教わる方なのです。ただ、研究者として調査の仕方やまとめ方は教えることができます。この発表の仕方、そして調査の仕方、テーマのまとめ方はきちんと教えます。つまり、私は「教師」というよりは「カウンセラー」なのです。【写真は、バレンタイン監督と談笑する学生たち】





学生の好きなことは教室の中にはありませんから、そこに閉じこもっていても何も見つけることはできません。それは教室の外に広がる無限の空間にあるのです。学生は、時間的にも空間的にも教室の外で発信する内容を生産します。教室は、外でとれた産物を英語で見せ合うマーケット・プレイスなのです。実際、私の授業風景は、どちらかというストリート、すなわち街角のそれに近いのです。何が飛び出すかはわかりません。私などは、その場所に住んで面倒をみるおじさんのようなものですが、取りまとめ役も学生が自発的に行います。司会は学生さんが順繰りにやりますし、私でさえ、意見を述べる時には司会に断らなければならないのです。

最終発表は今では全部ウェブ上に掲載されますから、このマーケットの買い手は学生でもなければ私でもありません。世界中の誰が読むかは分かりません。ある日、突然とんでもない人からコメントが来ます。

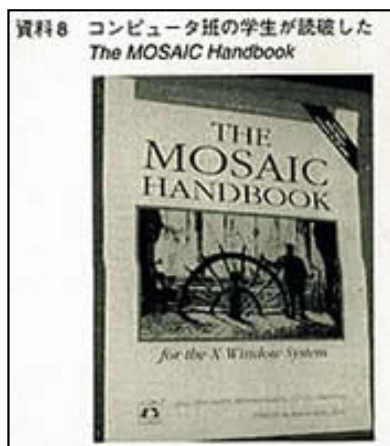
3年ほど前に1960年代のフォーク・グループのブラザーズ・フォーの英語とその社会的背景について調べていた人がいます。その人の発表は、まずブラザーズ・フォーの世界ファンクラブにリンクが張られました。すると、ブラザーズ・フォーのメンバーから、こんな素晴らしいウェブサイト日本人の一学生が作ってくれたことにいって[感激した旨のメール](#)が届きました。

このように、買い手は世界です。グローバルなのです。学生さん達は、SFCの闇市をたちまち大規模なグローバル・マーケットに作り上げていたのです。

## コンピュータ・ネットワークの導入

SFCはコンピュータのインフラが整い、その上で何ができるかを実験したキャンパスでもあります。今まで、紙や鉛筆でやっていたことを、コンピュータを使ったらどうなるのか考えなければいけませんでした。義務ではありませんが、PCではなく、Unixというプロの使うインフラが敷かれていたのです。私たちのような年齢のいった文系の研究者には使いこなすだけの時間がありません。せいぜい電子メールを使ったり、インターネットで何かを調べる位で精一杯でした。コンピュータというよりは、デジタル技術によるマルチメディアのインフラが提供されたと言ってよいでしょう。

これは、コミュニケーションに関係してきます。今まで、紙に活字を書くことしか発表する術がなかったのに、文字のみか音声・映像でも自由にものが表現できる時代が到来したのです。今でこそ、ウェブやインターネット、ビデオ会議などが普及してきましたが、1990年代の前半には、文科系の学部では想像できないものがインフラとして提供されていたのです。これから20年後には本も新聞・雑誌も恐らく変わっているだろうし、学生さん達が社会で活躍する頃には、インフラに慣れるという以上にその上で様々なコンテンツを作り上げる能力を付けておかないと大変なことになると私は思いました。



そこで、私の1994年の英語クラスには、さっそくコンピュータ好きが集まり、コンピュータ班ができました。彼らは教室に来る代わりに私の研究室に集まり、自分たちの英語クラスをオンライン化するプロジェクトを始めたのです。まだホームページなどない時です。

クラスでは、毎年毎年学生さん達が好きなことをリサーチした結果、その報告書のファイルがたくさん提出されます。私の研究室は、1990年度からのものが150冊ほど並び、これ以上収容し切れなくなりました。このことに気付いたコンピュータ班は、その頃SFCでも利用され始めたインターネットに注目しました。

当時利用されていたブラウザは、「モザイク：MOSAIC」というものでした。モザイクなんて何やら怪しげな響きがありますが、これが現在広く利用されているWebブラウジングソフトの元になったソフトです。英語の得意

でない彼らは、このソフトの説明書を買って求めましたが、英語版しかなかったのにもかかわらず、3人で勉強会を始めてとうとうそれをマスターし、モザイクでページを立ち上げる方法を英語で発表しました。それから、この3名の学生たちは秋葉原でコンピュータの部品を買い、サーバーを立ち上げ、クラス全員がこのソフトを使えるように計画を練りました。

彼らはその過程を英語で書いて最終発表で報告しました。そうこうしているうちに、SFCで利用されるブラウザは「NetScape Navigator」や「Internet Explorer」などに変わりましたが、これらの学生のお陰で、私の英語のクラスはかなり早い時期にオンライン化されて、ウェブページ上で発表されるようになりました。彼らは、既に卒業し、今では大手やベンチャー企業のソフト開発のプロジェクトで中心的な役割を果たしています。それ以後、コンピュータ班は代々かわりましたが、今でも、この3人がOBとして私の授業のインフラの面倒を見てくれています。お陰で1994年以降の私の全授業記録は、[こちら](#)にアクセスしていただければ読むことができます。

現在、私の研究室は、[SFCにおける21世紀COEの研究プロジェクト](#)に参加して、発信型の英語e-learningの開発を行っています。その原点を作ってくれたのはこれらの学生であることを付記しておきます。私たちの英語e-learningの活動につきましては、別の機会に紹介いたします。

[Back to top](#)

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告(大阪・広島・福岡)
- 連載:日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 慶應義塾大学SFC 鈴木佑治氏によるコラム—
- 留学生インタビュー

\*TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス (ETS) の登録商標です\*

> [HOME](#)

## セミナー報告(大阪・広島・福岡)

TOEFL事業部では、2003年11月から12月にかけて大阪・福岡・広島の3都市において教育関係者を対象としたTOEFL研究セミナーを実施しました。同セミナーではTOEFLテストを運営する米国ETS開発のオンライン・ライティング自動評価ツールCriterionも紹介しました。各会場とも多くの質問が寄せられ、参加者の皆様には情報収集・意見交換の良い機会となったようです。

TOEFL事業部では、2004年も様々な視点からのセミナーを企画・開催していきます。ご参加をお待ちしております。(開催予定詳細は下記参照)

### TOEFL®研究セミナーシリーズ(西日本)実施報告

#### \*\*\* 大阪会場 \*\*\*



・日時:	2003年11月15日(土) 18:00~20:00
・場所:	大阪市中央公会堂(大阪市北区中之島)
・参加人数:	30名

大阪セミナーは、大正7年に建築されたメトロな赤レンガの洋館で実施しました。

土曜夕方の6時からという時間にもかかわらず、多くの皆様の参加がありました。参加者の皆様からは多くの質問があり、活発なセミナーとなりました。特に次世代TOEFLに加わるSpeakingセクションについてのご意見や次世代TOEFLテストに関する最新情報収集など、皆様の関心の高さが伺えました。

(写真:セミナーの様子)

#### \*\*\* 福岡会場 \*\*\*

・日時:	2003年12月6日(土) 14:00~16:00
・場所:	アクロス福岡(福岡市中央区天神)
・参加人数:	25名



福岡はペーパー版TOEFLの会場が設置されている都市だけに、現行のTOEFL - PBTから次世代TOEFLに至るまで幅広いご質問を受けました。このセミナーでは、セミナー終了後に約1時間の懇談会を設けたことにより、各学校・教育機関に勤務される皆様方にはまたとない情報交換の場となりました。

(写真:懇親会の様子)

\*\*\* 広島会場 \*\*\*



・日時：	2003年12月13日（土） 14:00～16:00
・場所：	RCC文化センター（広島市中区橋本町）
・参加人数：	18名

多くの方が熱心にメモを取りながら聴き、勉強方法に関する質問が多数寄せられ、参加者の意識の高さと熱気が伝わってきました。また福岡会場同様、広島でもセミナー終了後に約1時間の懇談会を設けました。打ち解けた雰囲気の中でコミュニケーションを図る場となり、非常に有意義なものとなりました。

（写真：講演中、熱心に耳を傾ける参加者の様子）

説明会実施のお知らせ！（この説明会はすでに終了しています。）

平成15年度より、私費外国人留学生入学試験における英語能力判定基準としてTOEFLスコアを課す大学・短大が増えてきました。これを受けて、TOEFL事業部ではTOEFL-PBT（ペーパー版テスト）の会場地域であり、留学生が特に多い九州地区でTOEFLテスト（特にTOEFL-PBT）に関する説明会を下記日程で開催することになりました。

留学生と身近に接する日本語学校関係者、大学・短大・高等学校の留学担当者の皆様を対象にTOEFLテストについて（申込方法、スコア受理、スコア送付依頼の手順など）わかりやすくご説明いたします。皆様のご参加をお待ちしております。（定員制・要予約）

・日時：	2004年3月20日（土） 13:30～15:30
・場所：	アクロス福岡 会議室601 福岡市中央区天神1-1-1
・対象：	日本語学校関係者・大学・高等学校の留学生担当者 ほか英語教育関係者（留学生・学生個人の申込は不可）
・参加費：	無料

国際教育交換協議会TOEFL事業部では、2004年春にかけて下記のスケジュールで説明会・セミナーの実施を予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。（説明会・セミナーはすでに終了しています。）

日程	開催場所
2004年3月20日（土）	福岡（ペーパー版TOEFL®テスト担当者向け説明会） 決定
2004年3月下旬	東京（TOEFL®研究セミナー）
2004年4月中旬	札幌（TOEFL®研究セミナー）
2004年4月下旬	名古屋（TOEFL®研究セミナー）

[Back to top](#)

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告 (大阪・広島・福岡)
- 連載: 日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 慶應義塾大学SFC  
鈴木佑治氏によるコラム-
- 留学生インタビュー

\*TOEFLは、エデュケーション・テストング・サービス  
(ETS)の登録商標です\*

> [HOME](#)

## 言葉の玉手箱

連載：第11回

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。

毎回ご好評をいただいているこのコーナーでは、ETS公認コンサルタントの川手 ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説していただきます。言葉の世界の面白さをお楽しみください。



Dr.川手 ミヤジェイエフスカ 恩(めぐみ)

テンプル大学ジャパン 大学附属英語研修課程 助教授

(Megumi Kawate-Mierzejewska, Ed.D, Temple University)

\*\*\*\*\*

2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門分野： 中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics)

### "OK?" - 使いすぎに注意しよう!

今回は文末に使われる"OK?"に焦点をあててみたい。日本語の話し言葉においては、『わ』『よ』『ね』『ねえ』などという終助詞がかなり頻繁に使われるが、英語ではどうなのだろう。日本語母語話者が英語を話すときにそれらのかわりとなる"OK?" "Right?"そして付加疑問形を必要以上に使いすぎて英語母語話者から誤解を招くようなことはないだろうか。



先日筆者が非公式に行ったアンケートでは、英語母語話者によれば、日本人英語話者はそれらの表現を使いすぎると感じているようである。そしてその表現（特にここでは"OK?"）は、時と場合によってはかなり失礼な印象を与えたり、年少者が物をねだる時によく使うことから表現自体を稚拙なものにしたりしているようだ。前者に関して、ある会議の最終業務を確認するための日本人と英語母語話者の英語での会話



(話し手と聞き手は改まった会話[formal conversation]をするはずの関係)に立ち会ったことがあるが、日本人英語話者はそれぞれの業務事項を確認するたびに『業務事項列挙+OK?』の形を使い"OK?"というのを連発していた。聞き手である英語母語話者は時間がたつにつれ、この日本人英語話者はどうやらこの表現しか知らないのであろうと考えたのか、かなりダイレクトな返答をするようになり、確認事項が正しくない時は"No."と手短かに答え（わかり易くしたつもりであろうが・・・）更に"the correct XXXXXX is ...

"と話すようになっていた。会話の本質が見失われつつあるかのようにも思えた。どうやら、"OK?"の連発は、聞き手は無意識的であったのかもしれないが、この状況では不適切でいい感情は持たなかったに違いない。一方、日本人英語話者はといえば、会話を通して精一杯自分たちの業務内容の確認をしていたつもりなのであるが・・・。

何年も前になるが、筆者の知りあいに"OK?"を連発する英語母語話者がいた。何かにつけてこの表現を連発し、言い方がかなり横柄でどうも"bossy"に聞こえて不快な思いをしたものだ。どういうわけか、彼女は英語母語話者に対してはそのような言い方はしていなかったようだが……。自分が使う"OK?"という表現が、英語母語話者に不快感を与えるということを知っていたかのようなのだ。英語母語話者間ではどうやら本能によってその使用を駆使しているようだ。



最後に、英語母語話者でない英語話者は"Right?" や"OK?"など他の付加疑問形の使い方なども含めて、適切な使用方法について意識して考えてみる必要がある。更に日本人英語話者は、日本語を話すときに使う終助詞のような感覚で使ってしまうと、必ずしもいい結果を生まないということも心にとどめておくといだろう。

[Back to top](#)

©2004, CIEE All Rights Reserved.

- 巻頭特集:世界で活躍する日本人
- セミナー報告(大阪・広島・福岡)
- 連載:日本から発信する英語
- 言葉の玉手箱
- 慶應義塾大学SFC  
鈴木佑治氏によるコラム-
- 留学生インタビュー

\*TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス  
(ETS)の登録商標です\*

> [HOME](#)

## 留学生インタビュー



# Ms. Noriko Nagai

University of Cincinnati

永井典子(ながい・のりこ)さん

今回はアメリカ・オハイオ州にある[University of Cincinnati](#)でフルートを学ぶ永井典子さんです。今学期からDouble Major(2つ専攻を持つこと)になるという永井さんに、音楽留学について聞きました。

## Profile

1999年8月 渡米(New York)  
2000年9月 入学  
2006年6月 卒業予定

大学:  
University of Cincinnati  
College-Conservatory of Music

専攻:  
Performance Studies(Flute)+Jazz Studies

-University of Cincinnatiへ留学を決めるまでについて教えてください。

師事したいと思った先生がいたからです。

私は高校卒業後すぐに先生と語学学校を決めるために知人の住んでいたニューヨークに行きました。そのときに4人ほどの先生からレッスンを受け、その中で特に今の先生にとっても惹かれました。先生はUniversity of Cincinnatiの教授なのですが、金曜から週末はニューヨークでも教えていました。

その後一旦日本へ帰国し、その先生のレッスンを受けるため再度ニューヨークへ留学しました。月曜から木曜は語学学校、金曜はジュリアード音楽院で先生のレッスン、週末は勉強したり、ニューヨーク中を色々歩き回ったりという生活でした。そして先生が教授をされていたUniversity of Cincinnatiへ進学を決めました。

-大学生活について教えてください。

University of Cincinnatiは、大学と大学院合わせて学生が2万5000人ほどで、パートタイムの学生も合わせると3万人を超える大規模な総合大学です。私は音楽専攻なのでほとんどの時間を音楽科の校舎で過ごしますが、一般教養のクラスも履修しなければなりません。キャンパスが広大なので授業開始15分前に音楽科の校舎を出なければ間に合わないものもあります。音楽科は、厳しい競争の中で勝ち抜いていかなければならないので、ピリピリした面もありますが、いい意味でライバル同士といった感じで自分を伸ばすには良い環境と言えらると思います。やはり、自分のいる音楽科の校舎が一番ほっとしますね。



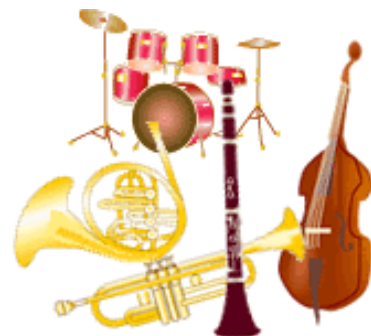
今は学部の4年生ということもあり、授業も少なくなってきました。火曜日と木曜日は1コマずつしかありません。しかし毎日最低4時間練習をして、加えてCDを聴いて勉強しなければならず、忙しい日々を送っています。週末は少し気を抜いて、友達とランチや買い物に行ったりする時間を作って自分を追い込まないようにしています。1、2年生の頃はいわゆるアメリカンなホームパーティーにも行きましたが、最近はごく親しい友達と食べ物を持ち寄って、プライベートなパーティーをすることが多いです。

-TOEFL受験の目的と対策を教えてください。

大学入学の際に外国人留学生はTOEFLスコア517を要求されていたので受験しました。私の場合、アメリカ人の家庭に住んでいたこともありListeningが得意でした。不得意だったのはReadingで、長い文章を読むのは本当に疲れました。TOEFL対策としては、ニューヨークにいた時に7ヵ月ほど語学学校に通いました。語学学校で受けた団体向けTOEFLプログラム（TOEFL-ITP）のスコアは420でした。その後初めて受験したTOEFLテストは490で、4ヵ月後に最後に受けたときは550まで上げることが出来ました。これは深夜2時まで毎日勉強し、周囲のアメリカ人と努めて話した結果だと思えます。単語の覚え方でお勧めな方法は、単語を英語の意味で覚えることです。あわせて関連する例文も覚えることです。慣れていないと本当に面倒なのですが、こうすることによってその単語を忘れにくくなり、話すときに自然に使えるようになります。大変そうに聞こえるかもしれませんが、当時は毎日が本当に楽しかったです。英語の勉強をすることや、身の回りに英語があふれている環境に身を置いていることが本当に幸せでした。だからこそスコアも伸びたのだと思えます。TOEFLのスコアを上げるのは大変かもしれませんが、点数だけにとらわれ、躍起になっている方もいらっしゃると思います。でも大切なのは、「自分がどれだけ楽しんで勉強し、吸収しているか」ではないでしょうか。

-今後について、そして卒業後の目標について教えてください。

私は今までクラシック音楽一筋でやってきたのですが、ここに来て前から好きだったJazzを自分でもできることが分かりました。そして勉強していくうちにJazzの虜となり、本来なら今年（2004年）卒業して大学院に行くはずだったのですが、Jazzをもっと学びたいという熱意が勝りDouble Major（2つ専攻を持つこと、即ち卒業すると2つBachelorの学位がもらえる）をすることにしました。今年度の始め（2003年9月）にJazzのコースにも合格したため大学院に行かずここに残ることにしました。Jazzとクラシックのプログラムは重複する単位もありますが、それでもたくさんの異なるクラスを履修しなければなりません。ですから1つの学位を取得するのに4年かかるところを、2つの学位を6年で取得することにしました。実は5年間でも終了可能なのですが、その分一つの





学期により多くのクラスを取らなければなりません。

私が、大学で専門的にJazzを学ぶことにしたのは、じっくり打ち込むためです。だから無理に頑張って1年で終わらせるより、ゆっくり取り組んだ方がしっかり学べると思い、予定より2年オーバーでの卒業を目標としました。卒業後はできればアメリカに留まりたいのですが、ビザの関係で日本に帰らなくてはならないかもしれません。大学院に行く可能性もありますが、大学終了後のことはその時に考えます。結局はどこにいても自分のやりたいこと(=音楽を弾くこと)が続けられればいいのですが、特に力を入れているジャズをやろうと思うと、やはりアメリカがいいのです。

## ...Message.....

-最後に、アメリカの大学で音楽留学を考えている方へメッセージをお願いします。

逆に私から聞きたいのですが、アメリカでの音楽留学を考えているみなさんはどうしてアメリカを選ばれるのでしょうか。日本ではまだまだ音楽留学するならヨーロッパという考え方の方が多い中、あえてアメリカを選ばれるのはなぜでしょう。

私は高校生の時、2度アメリカでサマーキャンプに参加し、それぞれ2ヶ月間アメリカの音楽の教え方に触れ、感銘を受けました。音楽の喜びを教えてくれる、日本とは異なった教え方で、私はこちらの方が自分に合うと感じました。ですから、これからアメリカに音楽留学する方は、それぞれの教育方法が自分にあっているかどうかをしっかりと知っておく必要があると思います。もしかしたらヨーロッパの方が合っている場合もあるかもしれないからです。一番良い方法は、やはり留学する前に目星をつけた先生にレッスンを受けることです。何も調べず大学の名前や評判だけで判断するのは音楽留学には大きなリスクが伴います。自分のために最良の道を選ぶよう頑張ってください。

大切なことは「自分が何をやりたいか」だと思います。いい加減な気持ちで留学しても、結局は適当な結果になってしまうと思うし、自分に信念があれば、辛いことも辛くないと感じないと思います。そして、自分のやろうとすることに喜びを見つけないと難しいと思います。面倒くさいとか、早く卒業して学位さえ貰えばと思うより、その一瞬一瞬に自分は学んでいっているという幸福感を味わうことができれば必ず大学留学は有意義なものになると思います。

(インタビュー：TOEFL事業部 山口 学/2004年1月6日)

[Back to top](#)

©2004, CIEE All Rights Reserved.